

# 新井英一さんライブ

## 身も心も越えた温もりと感動

### 韓国ツアーを経て新境地も

日本で生まれ育ち、朝鮮半島の血を引く自らを「コリアンジャパニーズ」と呼ぶ新井英一さんのライブが10日後、飯田山下久堅聖徳の教会堂で開かれた。東京や名古屋などから駆けつけたファンも含めて約百五十人が本堂を埋め、この世に生を受けたことへの誇りと感謝を語り感えた。新井さんの温もりが伝わった。

新井さんの「新信院 ライブ」は九九年に韓国ツアーに続き、「長い」二回目。「在日」野ツアー「韓国ライブ」であることと日本社会の中で愛さなければ、葛藤しながらもひたすらに生き抜いた。新井さんの姿に共鳴する有為者を引き続き輩出した。今回は、四月二十二日からハンケルで唄つこ

とが活躍した彼は、ハンケルを練習して唄ってきた。清河は七千人の町なのに、二千五百人も集まった。などなど

雨降りとなったこの日は、しとしとと降る雨音が耳を渡すまじと本堂にも響く。前回の「新信院ライブ」とは一変、九九年の同ライブでは、天龍川を挟んだ対岸に広がる飯田市街地の夜明けと夕日が一望できたため、新井さんはライブの途中で「どういうのも、いね思ふの車みたい。」

本くて低く、かすれがかった声と本堂に響き渡る。最後は、父親の死後初めて清河を訪れて、向らのルーツと平生、旅の思い出をストレートに歌い上げた「清河への道」でしめくくった。

アンコールでは、ルイ・アームストロングの「スワット・ア・ワシントン・ワールド」

を日本語で披露。韓国ツアーを一人旅の一つの区切りにした。と新井英一さんの、新境地を迫り見させた。

今回の「新信院ライブ」では、内モンゴル出身で「スーホーの白い馬」を作曲した李波（リ・ボ）さんも民謡舞（ハダダ）を披露して名古屋中内から駆けつけ、初の共演だった。



新信院の本堂で熱唱する新井英一さん